依田勉三物語

（上・中・下）

《登場人物の紹介》

依田勉三　依田家次男。父・善右衛門、母・ブン。三余塾門下生。十勝野開拓に一生を捧げる。

依田佐二平（さじべい）　依田本家長男（上の兄は幼少期に死去）。勉三のすぐ上の兄。幼名・清二郎。三余塾門下生。依田家は元武田武士。農民となって伊豆松崎大沢村を拓き、豪農として大沢一帯をまとめていた。佐二平もまた一家の長、まとめ役として、地域の発展に尽くした。妻・フジは善六の姉。依田家は一族を挙げて勉三の十勝野開拓を助けた。

土屋三余　土屋家は代々小田原北条氏に使えた郷侍であったが、農民となり松崎那賀の代々庄屋を務める。幕末、宗三郎（三余）は江戸で学んだ後、故郷松崎で農民・商人の子弟相手に三余塾を開き、高度な教育を施し、門下生に大きな思想的影響を与えた。

依田善六　依田本家（佐二平と勉三の実家）の分家の豪商・大屋「塗り屋」の長男、家長。幼名・園。佐二平と共に優秀な三余塾門下生であった。実業家として優れ、佐二平と共に善六はよく郷土に尽くし、物心両面にわたって勉三と晩成社を支えた。善六と佐二平・勉三とは従兄弟。善六の姉フジは佐二平の妻で、佐二平の妹ミサが善六の妻、善六の妹リクが勉三の妻。

土屋ミヨ　三余夫人。「塗り屋」の一人娘。善六は甥。三余を良く助け、三余亡きあとも、勉三の良き支援者となる。

土屋準次　塗り屋の長・善六の弟。三余塾生。三余死後、土屋家の養子となり、土屋家を守った。明治 36 年に農商務省（現在の水産省・経済産業省）の試験場からネーブルオレンジを譲り受け、三余農園を開設。以来その歴史は今日まで 100 年以上に及ぶ。勉三の良き相談相手であった。準次の息子完吾は佐二平次男薫平と共に途別水田造りに参加協力している。

柄在（からざい）の伊助　三余塾塾生、貧しい農家の子。勉三と親しかった塾生仲間。中途でやめて京都の畳職人に。〈架空の人物〉

依田リク　勉三妻（離婚し、後にまた戻る）。依田分家の豪商・大屋「塗り屋」の主・善六の妹、勉三とは従妹関係。土屋三余夫人・ミヨは叔母（実家の塗り屋の出）。勉三との間に生まれた息子俊介は夭折。病弱が原因で離婚。リクの母親ミナは離婚に心痛めた。一時、神田の乾物屋小林乙松の下で暮らすが、晩年再び帯広に帰り、後妻サヨの死後、病気がちの勉三を支えた。

依田善吾　勉三の８歳下の弟。浜店に養子入りし、材木商を営む。後に帯広に移り、晩成社副社長として実業を手広く展開し、勉三を支える。が、投資に失敗し帯広を去る。妻リツはしぶしぶ帯広行きに同行、後に離婚。後妻・ラク。

松本奎堂　幕末の志士。大和義挙に敗れ、惨死。三余の親しい友人。

小倉鯤堂（こんどう）　幕末の志士。松陰の弟子。三余、奎堂の親しい友であった。

鈴木真一・美遠子（みおこ）　勉三の母方の叔父。写真師。横浜で写真館を経営。勉三の良き後援者。保科近悳の妹・美遠子が妻。

保科近悳（ちかのり）　会津藩家老（別名：西郷頼母）。藩主容保と意見を異にし、藩内で孤立。箱館戦争に加わる。数奇な運命を辿り、勝海州の手引きで伊豆松崎の謹申学舎教授に就き、勉三・佐二平らを導く。勉三は生涯、師として敬う。息子・吉十郎有隣は二十二歳で死去。鈴木真一と結婚した美遠子は妹。雲井事件で獄に繋がれた保科陽次郎は弟。藩主容保と共に日光に赴き、宮司となり、容保を支えた。晩年は故郷会津で宮司を務め、静かに余生を過ごす。

松平容保（かたもり）　会津藩主。保科近悳の主君。戊辰戦争後は日光・上野東照宮宮司を務めた。

松平定敬（さだあき）　桑名藩主。容保の弟。箱館戦争に加わる。

柏木忠俊　惣藏（俗名）。韮山代官（江川担庵）家臣。勝海舟と親しい仲。三余、依田佐二平と交流あり。

沢辺琢磨　箱館神明社宮司（養子）。坂本竜馬の従弟、竜馬の勧めで箱館に逃れる。後にロシア正教信徒となり、箱館ニコライ堂の司祭に。近悳（ちかのり）の息子を預かる。

田本研造　箱館の写真師。生家は和歌山県の林業地主。凍傷をロシア人医師の手術で

治癒。ロシア人より写真術を学ぶ。北海道開拓使お抱えの著名な写真師で鈴木真一・保科近悳とも親しく、勉三をよく助けた。

黒田清隆　薩摩藩士。北海道開拓使長官としてケプロン・クラークらを招聘、札幌農学校設立など北海道開拓に大きな役割を果たした。明治14年の政変・払い下げ問題で第一線を退く。

ケプロン　アメリカ人、元軍人、米国務長官。黒田によって招聘され、3年間滞在し、北海道開拓の青写真『ケプロン報文』を纏め上げ、勉三に影響を与える。

ライマン　ケプロンがアメリカから呼び寄せた地質調査技師。1876（明治9）年5月10日、ライマンは日本最初の彩色地質図「日本蝦夷地質要略之図」出版した。この5月10日は「地質の日」とされた。

ワッデル　アイルランド人。キリスト教宣教師。ワッデル塾を設立して英語を教授。勉三もその塾で学んだ。

渡邊勝（わたなべまさる）　勉三より一つ年下。尾張藩鎗術指南役の家に生まれた（元士族）。　豪放磊落で英語に堪能。ワッデル先生に拾われ、塾の講師を務め、キリスト教信者に。塾で勉三と出会い、伊豆の中学の英語教師に。晩成社社員として開拓に参加、勉三と生涯を共にする。末弟・豊吉も後に徒北、勝を助ける。

鈴木銃太郎（じゅうたろう）　キリスト教神学校で渡邊勝と出会い、勉三と交流が生まれた。一時牧師となるが挫折。晩成社に参加し、十勝野帯広へ。アイヌの娘コカトアン（常盤（ときわ））と結婚。晩成社と意見を異にし、社を去るも、音更の開拓に邁進し、勉三・勝とは生涯の交流・友情を貫いた。

鈴木親長（ちかなが）　鈴木銃太郎の父親。元上田藩士。藩主一族の影響でキリスト教徒となる。横浜公会の執事となり、宣教師ブラウンに師事し、長男・銃太郎、娘・カネも信者となる。この3人の鈴木親子は晩成社に参加し、懸命に開拓事業に取り組んだ。親長は晩年は東京で暮らし、この地で没する。妻・直は上田藩士時代の奥女中で、北海道に移り住むことはなかった。

鈴木カネ（渡邊カネ）　親長の長女。誠実なクリスチャン。横浜共立女学校を出て、母校の教師となる。渡邊勝と結婚し、晩成社の第1次開拓団のメンバーとして帯広へ。帯広では晩成社及び開拓に参加した多くの女性の精神的支えとなり、貧しい開拓民やアイヌの子供の教育に力をいれた。娘・イズミ。

小林知行（ともゆき）　尾張藩藩士。八雲村開拓者。近悳の知り合い。

伊達邦直　仙台亘理藩藩主。有珠地方開拓。田村顕允（あきまさ）は邦直の家臣。

内田瀞（きよし）　札幌農学校第一期生出身者。クラークの愛弟子。開拓使御用掛として十勝野調査行う。勉三に刺激され、後に官を辞し、農業・牧畜業に専心する。義兄森源三は札幌農学校の教授。

田内捨六　札幌農学校第一期生出身者。クラークの愛弟子。内田と共に十勝野調査。

佐藤嘉兵衛（かへえ）　湧洞の旅人宿の主。元松前藩士。経歴不詳。勉三の生涯を通しての話し相手生花苗（オイカマナイ）の牧場地は嘉兵衛宿の隣にあり、嘉兵衛が譲ってくれたもの。

鈴木 清　九鬼藩藩士（現兵庫県三田）。神戸の実業家にしてクリスチャン。キリスト教結社である赤心社を組織し、北海道日高の西舎・荻伏の開拓を進める。

加藤清徳　赤心社開拓団の現地責任者。元々は神道信仰者であった。

澤茂吉（しげきち）　元九鬼藩士で慶応義塾出身。清徳の後を継いだ赤心社開拓団の現地責任者で、荻伏開拓を成功させる。

田中助（たすく）　赤心社開拓団に入ったキリスト教徒。牧師として貢献する。

中山久蔵　河内国（現大坂府南河内）出の農民。幕末最中、あちこち旅して歩き、仙台藩の白老陣屋務めを経て苫小牧に入殖し、更に島松に入り、寒地米作に取り組み、成功させた。勉三の寒地米作の師。

松本十郎　元庄内藩士で、黒田に見いだされ、北海道開拓使の高官に。十郎は中山を高く評価し、深く 交わった。アイヌの擁護者で黒田と意見を異にし、故郷へ帰る。

竹林盛一　田本研三の弟子。札幌在住の写真師。

吉村旅館　伊豆豆陽中学近くの旅館。渡辺勝や依田家の定宿。

依田新四郎　佐二平長男。勤申舎で近悳に学ぶ。

中（なか）　啓介　勝・銃太郎の親友。鈴木写真館の在った横浜在住のクリスチャン。

加納通広　西伊豆加納村の農民出身。士分となり一時新選組に参加。後に薩摩藩に拾われ、新選組隊長・近藤勇の首実検に立ち会う。黒田について北海道に渡り、開拓使に務める。同郷者として勉三の開拓地探しに協力する。

渡良瀬寅次郎　伊豆に近い沼津の兵学校出身。札幌農学校を首席で卒業。クリスチャンで、開拓使農商務省に務め、勉三の十勝野入りの後押しをする。

佐藤秀顕　元伊勢藤堂藩藩士。ライマンの通辞として十勝野土地調査に協力。後に開拓使書記官に。

若松忠次郎　青森出身。十勝広尾村場所請負人から出発し、後に函館に居を構えた実業家（駅前の若松町に名前残る）。有能な北海道財界人。大津の水産組合長堺千代吉を勉三に紹介。

江（ごう）　正敏　元磐城平藩士。維新後、北海道に渡り、漁業実業家として成功する。十勝野の大津・函館で活躍。晩成社と提携。江は、実業家仲間の栗山らと共に晩成社の事業をよく応援した。

馬場猪之吉・大川宇八郎　帯広先住者として勉三に協力。

国分久吉　オベリベリの無願入殖者。東北出身の農民。単身日高から帯広に入り、毛皮の卸を商い、農作も試みた。後に日高から家族を呼び寄せ、銃太郎の最初の越冬を支えた。

モチャロク　帯広アイヌの首長。勉三と最初の越冬者・銃太郎をよく支える。

コカトアン　モチャロクの娘。先発隊として初めて帯広で越冬した銃太郎をよく支え、後に銃太郎と結婚（和名は常盤）。

第１次晩成社開拓団に参加した伊豆の農民衆

山田彦太郎（32）妻・セイ（27）建吉（4）扶二郎（1）　彦太郎は43歳で病没。苦難を背負わされた妻セイは「勉三さんに騙された」と恨んだ。

藤江助蔵（34）妻・フデ（25）

山田勘五郎（53）妻・ノヨ（43）広吉（17）

山本初二郎（48）妻・トメ（46）金蔵（13）新五郎（6）　金蔵は後に札幌農芸伝習科に入学。

池野登一（42）妻・アキ（42）

進士五郎右衛門（21）父・文助（45）母・チト（42）

土屋広吉（24）

高橋利八（22）妻・キヨ（26）

高橋金蔵（52）

山田喜平（13）

吉沢竹二郎（34）　浅草の大工。

依田文三郎　勉三の弟。晩成社開拓団に参加し、勉三と共に開拓の鍬を振る。洋犬カメ（come カム転じてカメ）を連れて来る。病気で伊豆に帰り、若くして死す。

大石唯四郎　文三郎兄の唯四郎も、大石家に養子に入り、三余塾に学び、英語に習熟。勉三の後を追うべく、伊豆の開拓に力を入れるが、やはり若くして没した。

鈴木　直（なお）　銃太郎・カネの母。親長の妻。上田藩時代は奥女中務め、主命で親長と結婚。北海道移住を拒否し、東京に残る。

鈴木定次郎　銃太郎弟。東京・群馬に居住にするが、後年は十勝野音更に入り、兄を支える。

鈴木安三郎　銃太郎末弟。母親と東京に残る。

鈴木ミツ　銃太郎妹で養女に出る。

鈴木ノブ　銃太郎末妹、病弱で若くして死去し、銃太郎に影響与える。

栂野四方吉（とがのよもきち）　札幌勧業課殖民係として帯広に入り、晩成社と力を合わせ、アイヌに農事教授を試みる。札幌本庁と現地の板挟みに苦しみながら、アイヌを支援。

松元農事事務官　栂野の後任。勉三に協力的。

宮本万樹（まき）　釧路十勝郡長官。堀理事に呼応し、勉三に協力し、大津・帯広道路開削に乗り出す。

中戸川平太郎（なかとがわ）　釧路行きの船中で勉三と巡り合う。終生の友。相模の国の農民の子。生糸貿易商に務めた後、釧路に移住し、開拓・牧畜に取り組む。傍ら、交易商を営み、財を成す。後に釧路中心部となる一帯は大半が平太郎の所有地であった。釧路開拓の草分けで、勉三を尊敬し、よく支えた。

宮崎濁卑（だくひ）　栂野と共にアイヌ農事事務所を開き、アイヌに農事を教授。富山県人。本願寺開拓団として徒北。札幌独立教会で受洗したクリスチャン。後に富山県人を多勢呼び寄せ、十勝野開拓に功をなす。銃太郎・勝と親しかった。

樋口幾太郎　帯広に移住し、晩成社・善吾を助ける。妻フミは勉三の三つ上の姉。フミは病弱の依田一族、特に女衆の徒北には反対で、自らも徒北しなかった。が、娘・キクを勉三の養女に。

伊藤源兵衛夫婦　フミに代わって幾太郎に同行した下男夫婦。

岩村通俊　内閣直属となった北海道庁の最初の長官で、大資本導入による開拓推進を進めた。

堀　基（もとい）　岩村時代の道庁理事の一人。薩摩出身、黒田の下で開拓行政推進。払い下げ事件後民間に下り、実業家、道理事となる。十勝現地調査の折、晩成社を視察。勉三の道路開削願いの実現に助力。

岡田良一郎　掛川報徳社社長。佐二平と親しく、共に第 1 回帝国議会の議員として活躍。

勉三に報徳思想を伝えた人物。

近藤有寿（ゆうじゅ）　松崎の薬剤店店主。晩成社株主総代。リクの主治医でもあり、リクの母親・ミナのたっての願いで十勝野を訪れ、病気対策を助言。

松平毅太郎（たけたろう）　文三郎亡き後、勉三の養子として徒北。伊豆に近い駿東郡の士族松平家の息子。函館丸成を経営する勉三の代わりに生花苗の牧場を任されるも、若過ぎて年配雇用人と折合いが悪く、病を悪化させ、愛犬ロクを連れて帰郷後、直ぐに亡くなった。

高橋静次郎・平岡四郎　養子・毅太郎と共に徒北し、晩成社で働く。

永山武四郎　道庁長官と屯田兵本部長兼任。

ランドル　英国人探検家として十勝野に入り、勝・カネ夫婦宅を訪れる。英語に堪能なインテリ開拓者の存在に驚く。

柳本通義（みちよし）　札幌農学校を出て内田と共に道庁殖民課用員として各地の調査、測量、殖民地選定にあたる。

大井上輝前（てるちか）　伊予国大洲藩士。井上姓。佐幕派から逃れ、蘭学を学ぶ。函館奉行所の弟武田斐三郎の下で英語を学び、アメリカ留学。帰国後、勤王派として戦功をあげ、大洲藩に貢献。藩主より「大」の字を与えられ、大井上を名乗る。黒田開拓使の下で外交に取り組み、後に北海道集治監本監・典獄に任命され、十勝監獄の選定・建設・改革にあたる。クリスチャン。初めて日本に野球を紹介。

八田釧路分監長　大井上と共に十勝監獄建設に取り組む。

小林直次郎　釧路分監の御用商人。帯広に移り、日用雑貨店を開き、街づくりを推進。

原胤昭（たねあき）・留岡幸助　大井上を助けた「更生主義派」のキリスト教教誨師。

月形　潔（きよし）　北海道最初の監獄・樺戸集治監の典獄。

石井大津戸長　大津の戸長。勉三・リクはその娘美重を養女として迎えた。

酒匂（さこう）常明　道庁財務部長。寒地米作の推進者となり、中山久蔵を支援。

井田梯吉（ていきち）　写真師田本の門弟で、函館丸成時代の勉三・リクをよく支えた。

田村鉄也　伊豆で善吾の片腕となっていた男で、函館に移り、勉三と丸成を支えた。丸成撤退を請け、函館に自分の店を持った。

浅田楼　函館の温泉旅館。田本、勉三によく協力した。

依田美重　養女で、勉三・リクをよく支えた。函館時代、石井家の要請で実家に帰り実家の都合で他家に嫁入りする。

馬場八百蔵（やおぞう）　勉三の後妻・サヨの祖父八百蔵は八王子千人同心の一員で、幕府の求めに応じ、二人の息子を連れて北海道七重（ななえ）村の開拓に参加。一家は後に七重官園事務所勤務となる。ロシア正教の信徒。勉三の丸成時代、箱館で親しくした。

馬場政昭　八百蔵の長男。サヨの父親。箱舘戦争に参加し、一時金沢藩預けに。後に晩成社の生花苗牧場の管理人になるも、早くに病没。

馬場サヨ　トシ・ヨシの二女を抱えて離婚、13 歳上の勉三と再婚。二人の子千世は幼没。健康で、十勝野に一緒に帰り、農に勤しむ勉三をよく支えた。帯広で没す。義理の娘トシは勉三の助力で英国キリスト教団設立の女学校に進む

馬場正則　サヨの叔父。函館の区会議員、弁護士、新聞社設立者、ロシア正教徒で、函館の名士。

松田松次郎　三余塾生。伊豆で区長、松崎村長務めた後、佐二平の要請を受け徒北し、帯広の善吾を助けた。

中戸川熊次郎　函館の肉卸商。勉三が屠畜組合総代として公認セリ市の開設に飛び回ていた時、勉三の手足となって動いた。勉三の函館時代の心許せる友。

渡辺要　渡辺家の養子になった勉三の弟。三余塾生。松崎で、醤油業、牧畜、教育活動に力を注いだ。また兄佐二平の片腕となり、時々徒北し、勉三・晩成社を支えた。

渡辺陽（きよし）　要の息子、勉三の甥。丸成時代、リクが去った函館を訪れ、2 年ほど滞在し、勉三を慰めた。三余先生碑を勉三と共に訪れ、三余の教えを聞く。

二宮尊親　尊徳の孫。相馬藩の尊徳高弟の富田高慶に学び、相馬藩の興復社社長となり、十勝野開拓に臨み、自作農主義によって成功を収め、報徳精神を広めた。勉三とも親しく交際した。

鴇田（ときた）万吉　晩成社に酪農技術者として雇われ、各地の酪農家の元に送りこまれた。バター・チーズ・練乳造りを学んで帰る。

前田正名　薩摩出身士族。「布衣（無位無官）の農相」と言われた農政家。財閥養護の松方農政・財政を批判して敗れ、各地方を回って地方農業の視察・応援に力を尽くし、生涯を送る。十勝野を訪れ、勉三に歓待される。

依田八百（やお）・キク　八百（佐藤）とキクは共に養子夫婦。八百は伊豆松崎出身で、帯広の金物店に勤務していたところを勉三に見いだされ、養子に。キクはかつて帯広に移住したことのある樋口幾太郎と勉三姉フミの娘で、依田家の養女となった。